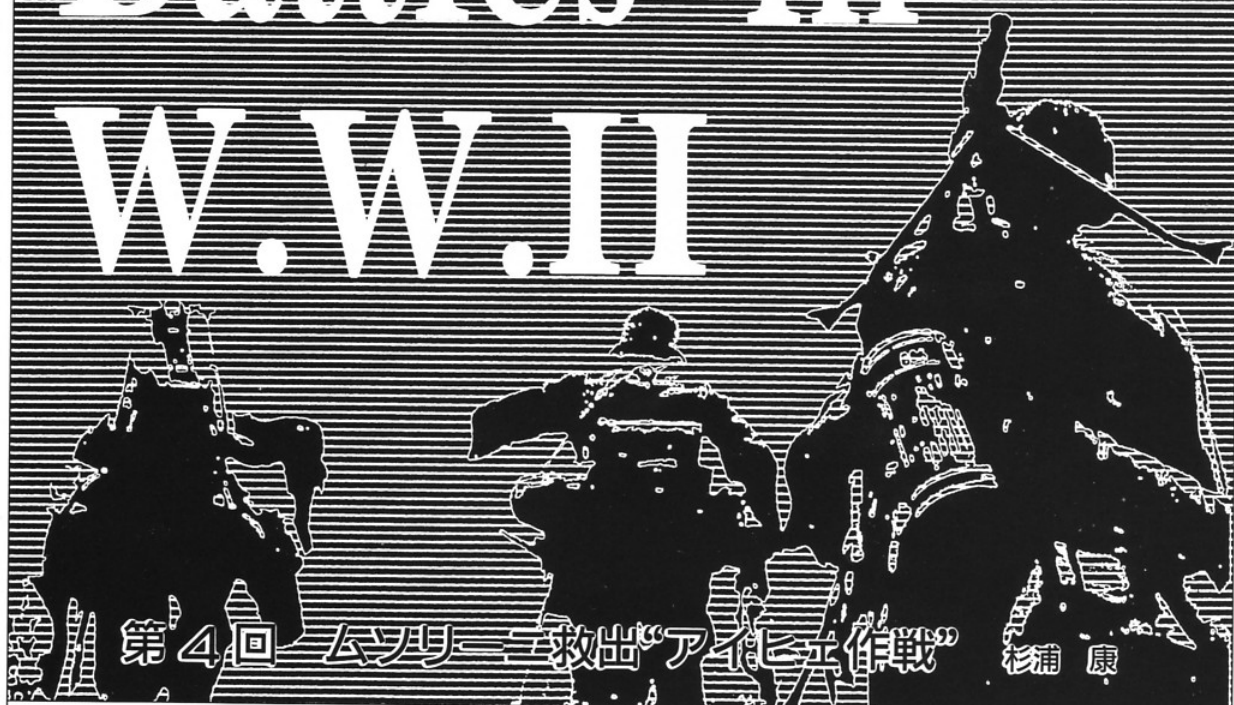


Battles in W.W.II



第4回 ムソリーニ救出“アイヒエ作戦”

杉浦 康

★ムソリーニ失脚

第二次大戦後半の1943年7月、連合軍は欧州大陸への反攻作戦の第一歩ともいえる、イタリアのシシリー島への上陸作戦を敢行した。ドイツと枢軸同盟を結んでいたベニト・ムソリーニの独裁政権はこの上陸作戦で揺らぎ、7月25日、エマニエル国王は電撃的にムソリーニを解任し、代わってバドリオ元帥を任命した。バドリオ政権はムソリーニを逮捕するとともに、連合軍との和平交渉に入ったのである。

一方、ムソリーニ逮捕の翌日、東プロシヤ(ドイツ東部)のラシュテンブルクにあった総統本営、ヴォルフスシャンツェ(狼の穴)のヒトラーは、ナチ特殊部隊の指揮官オットー・スコルツェニー SS 大尉を呼んで命令を与えた。指令は、

1943年7月10日、連合軍はイタリアのシシリー島へ、3,000隻の船舶を集中して上陸作戦を敢行した。この作戦によってムソリーニ独裁政権が倒れることとなる。ブレンガン・キャリアーに乗ってシラクサ湾から上陸する英第8軍の兵士たち。





(上) 蜜月時代の独裁者たち：ヒトラー(左)は1933年に政権を握って独裁者となった。ムソリーニ(右)は1924年以來のファシスト党首で、ともに絶頂期にあった頃、ヒトラーがフィレンツェを訪れた際に撮影された写真である。

(左) ムソリーニ救出「アイヒェ作戦」を実行した、オットー・スコルツェニー SS少佐。ヒトラーの護衛隊 SSアドルフ・ヒトラー連隊を振り出しに、SS特殊任務部隊フリーデントール・ヤークト・フェルバンデ(駆逐集団)の指揮官となった。以後ドイツ特殊任務の第一人者となる。

(下) ドイツ降下猟兵部隊育ての親といわれるクルト・シュツェント大將と降下猟兵達。ヒトラーはムソリーニ救出作戦では、降下猟兵部隊の全面的な援助と支援を約束した。実際、第1降下猟兵師団の将兵と改造グライダーや優秀なパイロットが提供された。



ムソリーニが幽閉されていた、標高 2,000m の山地に建設された「ホテル・カンポ・インペラトローレ」の全景だが、左端と中央にドイツ降下猟兵隊員が見える。また、グライダーの着地用の大地は手前側となる。



逮捕され行方の判らぬイタリアのドゥーチェ(統領)・ムソリーニを捜しだして救出することであった。

ヒトラーの命令でクルト・シュツェント大將の第 11 航空軍のドイツ降下猟兵部隊が、機動力を生かして全面的にこの救出作戦に協力することとなった。

7月26日、早くもスコルツェニー SS 大尉はローマに飛び、ドゥーチェの搜索を

開始した。ローマから連れ出されたムソリーニは、ガエタ湾から囚人収容所施設のあるポンツァ島に移され、やがてサルジニア島とコルシカ島の間にある要塞島ラ・マッダレーナ島を経て、1ヶ月後には再び、イタリア中部のアペニン山脈の最高峰グラン・サッソにあるウィンター・スポーツ・センターの宿泊施設「ホテル・カンポ・インペラトローレ」に収容され、警備兵が見張っていた。

卐『アイヒェ：“柏”』作戦発動

ドゥーチェの収容先を突き止めたスコルツェニー SS 大尉と特殊部隊員(SS 部隊と、特殊任務を行うブランデンブルグ大隊から選抜された優秀な隊員で構成されていた)は、シュトルと連絡機で上空から偵察を行い、地形を写真に撮影して奇襲攻撃の計画を練った。

その結果、ホテルの前面にある小さな平坦地へグライダーで強行着陸することとなった。だが、高度 2,000m の高地では空気が薄くグライダーの着陸は非常に難しいとされたが、スコルツェニーは実行を決意し、ここにムソリーニ救出作戦が開始されることとなったのである。この作戦は力と自由を意味する『アイヒェ：“柏”』作戦と名づけられた。

1943 年 9 月 17 日、10 機の DFS 230 グライダーに分乗した SS 特殊部隊員は、曳航機に引かれてグラン・サッソに向かった。グライダーは狭い場所でも着陸出来るように改造され、機首には逆噴射ロケット、機尾にはブレーキ用のパラシュートが装備されていた。

発進時に 2 機のグライダーが滑走路の爆弾口に引っかかり大破したので、8 機だけが離陸した。先頭機にはスコルツェニー自身が乗



り、他のグライダーを着陸地点へと誘導していった。

気流が極めて悪い山岳地帯を縫って飛ぶグライダーのパイロットの目に、やがて目的地が見えてきた。大小の石がゴロゴロする空き地に、第一次攻撃隊の1号機から5号機が次々と着陸する。

改造されたグライダーの側面扉から、空挺服に身をかためたSS特殊部隊員が次々と飛び出した。ある隊員はFG42空挺用自動小銃を抱え、また他の隊員はMG34軽機関銃を下げて、それぞれが14～5m彼方のホテルに向かって脱兎のごとく突進する。

情報ではホテルには150名ほどの警備兵がいるはずだったが、ホテル入口の哨兵は抵抗する間もなく制圧され、ドイツ兵はホテル内に飛び込んだ。SS隊員は無線機を銃床で打ち壊して外部との連絡を断つ。他の隊員はテラスを足場にホテル内にと殺到する。ほんの5分間の電光石火の出来ごとであった。

この間に援護部隊の6号機、7号機が着陸したが、8号機は乱気流に煽られて崖に激突四散してしまった。

★決死の脱出行

こうしてホテルの守備隊は制圧されムソリーニは救出された。だが、スコルツェニーにはどうしてここから重要人物を連れて脱出するのかという、次の難題が控えていた。

ケーブルカーで地上に降りるか？、あるいは付近にある飛行場を確保し、救援機を待つか？、それとも軽飛行機で脱出するか？

スコルツェニーは第3の案を選んだ。名パイロット、ハインリヒ・ゲルラッハ大尉の操縦するフィゼラー・シュトルヒ連絡機に、スコルツェニーとムソリーニ、それぞれが90キロもある2人の巨漢を乗せて、標高2,000mあまりの空気の薄い高地で、おまけに220mあまりの石だらけの山地から離陸するのは、ほとんど不可能に近いことだったが、ゲルラッハ大尉はこれをやってのけたのである。

ゲルラッハ大尉は、シュトルヒ機のエンジンの回転を最大限まであげ、機尾をSS隊員たちに押さえさせた。やがて、大尉が上げていた手をさっと振り下ろすと、一斉にSS隊員が手を離す。シュト

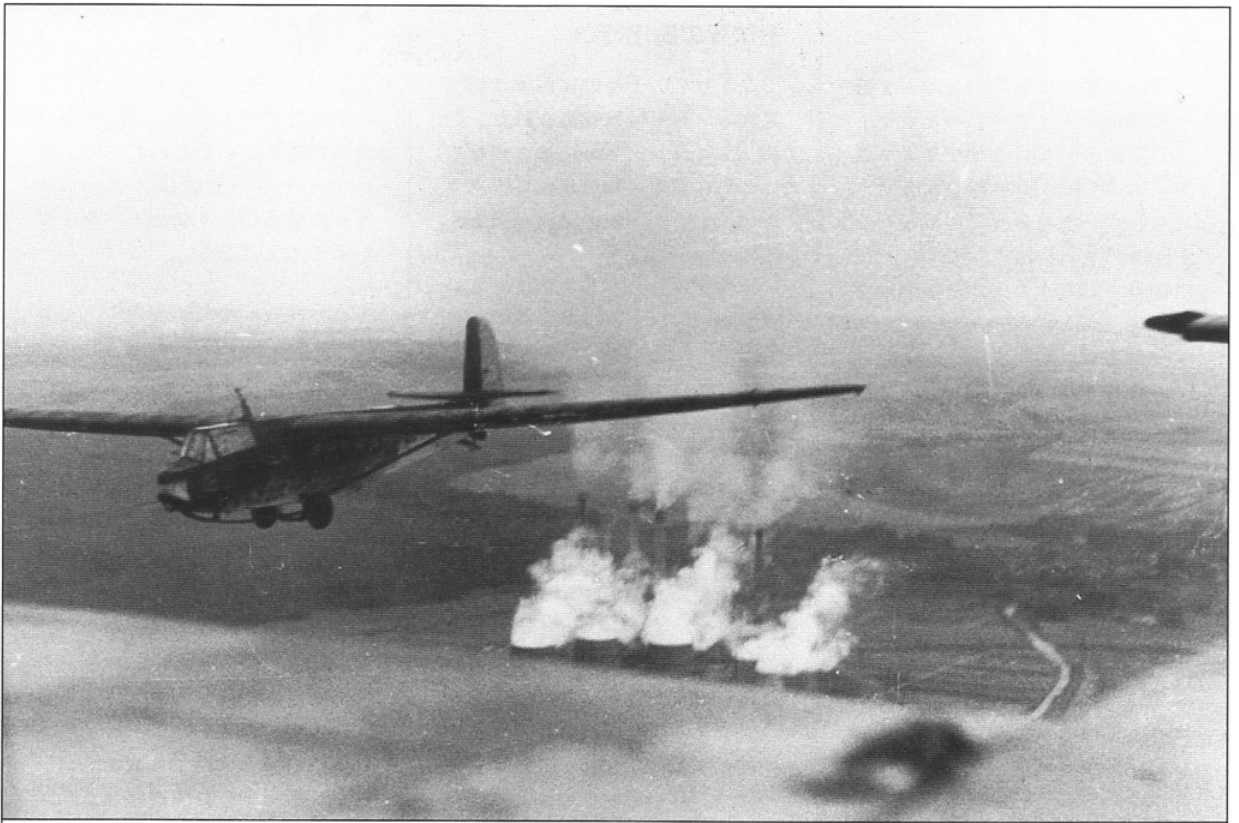
ルヒ機は荒れた空き地を右に左にバウンドしながら滑走し、ふらふらとやっと離陸すると、やがて山のかなたに消えて行った。見事に救出作戦は成功したのである。後にゲルラッハ大尉はスコルツェニーの推薦により騎士十字章を授章することになる。

★英雄、スコルツェニー

さて、救出されたムソリーニは、オーストリアのウィーンを経てラシュテンブルクで待つヒトラーのもとに運ばれた。ヒトラーは新しいイタリア・ファシスト政権を誕生させ、新政府をガルダ湖畔のガルナノに置き、首相にはムソリーニになった。だが、実態のない政権にはもはや力はなく、後にムソリーニは無残な最後を遂げることとなるのである。

救出作戦に成功したスコルツェニー大尉はSS少佐に昇進し、騎士十字章を授与され、一躍ヒーローとなりゲッペルススの宣伝に大いに利用された。その後、スコルツェニーSS少佐は特殊部隊を率いて、ハンガリーのホルティ総督の息子を誘拐する『ミッキーマウス』作戦や、ドイツ軍最後の反撃『ルントシュテット攻勢(バルジの戦い)』で特殊部隊を率いて、戦線背後の攪乱を狙った『グライフ』作戦で活躍している。







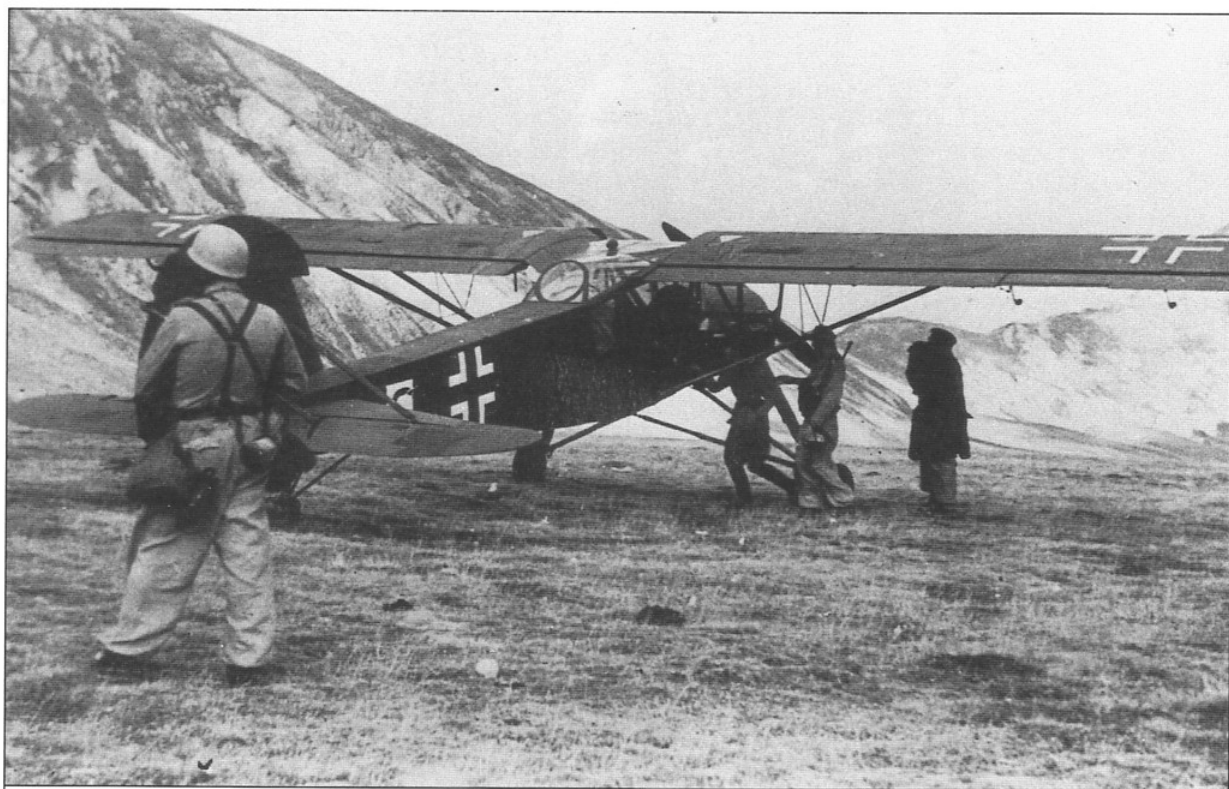
(上) 奇襲成功ムソリーニ救出！ ムソリーニの監禁されていたホテル前で撮影された写真だが、中央はスコルツェニー SS 大尉、黒コートの人物はムソリーニである。その右はシューベルト中尉、そしてヘルメットの人物は副官のラドル大尉である。

(左) 地上とホテルを結ぶ唯一の交通手段だった、村とホテルをつなぐケーブルカーの乗り場を警備するスコルツェニーの特殊部隊員。眼下にアクィラの谷が広がっている。



(左ページ上) アペニン山脈のグラン・サッソに向かう DFS230 グライダー：全長 11m、乗員 2 名の他、8 名の兵員を乗せることが出来るドイツ軍の標準的なグライダーだった。

(左ページ下) スコルツェニーの乗った先導機と思われる DFS グライダーで、グラン・サッソのホテル横の空き地に着陸したもので、後方に花崗岩の山肌が見える。また、グライダーの機体上部に MG15 対空機銃も認められる。



(左ページ上) ドウ
チェの脱出にはシュ
トルヒ連絡機が使用さ
れることとなった。パイ
ロットはベテランのハ
インリヒ・ゲルラッハ
大尉で、スコルツェ
ニー大尉と、ムソリー
ニの巨漢二人を乗せ、
重量過乗となった機体
を操り危険を冒して離
陸に成功、最後の仕上
げを行った。

(左ページ下) シュ
トルヒ連絡機を見送る
スコルツェニーの特殊
隊員たちで、第1降下
猟兵師団で選抜された
降下猟兵士たちである
が、任務がさまざまな
兵器を携行しているの
が見える。

戦い済んで：ムソリー
ニ救出作戦の長い一日
を終えた特殊部隊空挺
隊の古参曹長であるが、
緊張がほぐれほっとし
た雰囲気漂うグラン
サッソでの一葉である。

